

尹東柱の詩に見る信仰と平和への願い

井田 泉

1. 尹東柱との出会い

わたしは 1968 年春、大阪外国語大学朝鮮語学科（現、大阪大学外国語学部朝鮮語専攻）に入学した。その年、授業で金素月の「ツツジの花」「山有花」などを習い、あまりの美しさに鳥肌の立つような感動を経験した。けれども尹東柱との出会いはずっと後だった。

1984 年に日本で出版された伊吹郷による日本語訳詩集『空と風と星と詩——尹東柱全詩集』（影書房）を 1986 年 6 月に購入し、同じ月、ソウルに行く機会があつて韓国語原文詩集（正音社）を手に入れた。30 代の半ばだった。しばらくして詩の朗読テープ「尹東柱詩朗誦集」を東京の韓国書店（三中堂）で見つけて購入。「序詩」「自画像」「十字架」「もうひとつの故郷」「道」「星を数える夜」……。これに入っていたすべての詩をハンダールで入力し、伊吹訳との対訳版を作つて何度も何度も聞いた。ちょうどその頃、わたしは聖公会神学院の教員をしていたので、神学生たちにこれを紹介したりした。

わたしは尹東柱を自分にとって特別な存在と感じていた。彼とわたしにはいくつかのつながりがある。彼が学んだ立教大学でかつてわたしは 3 年間、文学部キリスト教学科の助手を務めた。かつて彼が属した英文（学）科はすぐ隣で、よく出入りした。またわたしが学んだ大学院は同志社大学であり、しかも学生時代に耽読したのがキルケゴールだった。さらにわたしの最初の赴任地教会の信徒には、尹東柱を逮捕したあの下鴨警察署に勤めている人がいたのである。

尹東柱が福岡刑務所で地上の生涯を閉じた満 27 歳の年に、わたしは神学校を出て働きはじめた。そのことに何か申し訳なさのようなものを感じ、彼を獄死させた日本人のひとりとして、彼を裏切るようなことはできないと思つてきた。ここでは詳しくは書けないが、わたしが自分の属する日本聖公会の戦争責任、植民地支配責任の問題に取り組むようになったのは、尹東柱との出会いと無関係ではない。

この稿では、尹東柱の詩をいくつか取り上げて、その中に彼のキリスト教信仰と平和への願いを探つてみたいと思う。すでに多くの方々の研究、解釈の積み重ねがあり、そこから学んだことも多い。ただわたしはここで彼の生涯と詩を心にとめて、そこから起こってくる自分なりの思いを自由に書き留めてみたいと願う。

ふと思ひ出すことがある。およそ 20 年前、同志社大学の神学館チャペルで開かれた尹

東柱を偲ぶ会で、短い講演をしたことがあった。そのときある参加者から「文学を宗教的に解釈するのはいかがなものか」という疑問が投げかけられた。わたしはおよそ次のように答えたと記憶する。「信仰者にとっては、＜信仰＞と＜生きること＞とは別のことではなく、切り離すことはできない。尹東柱の詩を信仰的に読まなくてはならないと主張したいのではない。ただわたしにとっては、そのように彼の詩が響いてくるのでそのように語ったのだ」。

その思いは今も変わらない。ただ、詩に込められた尹東柱の思いを、わたしの勝手な解釈で歪曲してしまわないかと恐れるばかりである。

2. 「ろうそく1本」と献げ物

尹東柱は1917年12月30日、当時の中華民国東北部間島省和龍県明東村で生まれた。そこはキリスト教精神と強い民族意識で結ばれた開拓村であったという。彼は、従兄の宋夢奎とともに長老教会で幼児洗礼を受けた。1932年、尹東柱は明東から北間島の中心地ともいべき龍井のキリスト系学校である恩真中学校に入学し、一家も龍井に移った。この年、日本により「満州国」建国が宣言されたので、彼の居住する地域も「満州国」の一部となっていた。

今日まで伝えられる彼の最初の詩は、1934年12月24日の日付の入った「ろうそく1本」「生と死」「明日はない」の3編である。満17歳の時の作品である。

ろうそく1本

ろうそく1本――

わが部屋に漂う香りをかぐ

光明の祭壇が崩れる前

わたしは清らかな献げ物を見た。

山羊のあばら骨のような彼の体、

その生命の芯まで

白玉のような涙と血を流し、

燃やしてしまう。

それでも机の隅でちらちらしながら
仙女のようにろうそくの火は踊る。

鷹を見た雉が逃げるように
暗闇が窓のすきまから逃げた
わたしの部屋に漂う
献げ物の偉大な香りを味わうのだ。

ここで想像してみる。この12月24日、おそらく彼は家族と一緒にクリスマス・イブの礼拝に参加し、イエス・キリストの降誕を祝ったであろう。

「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」ヨハネ福音書1:9
イブの礼拝と、そこで見たろうそくの光の印象が強く残っていたかもしれない。今、彼は、自分の部屋にともしたろうそく1本を見つめている。ろうそくは暗闇の中に輝くだけではない。彼はそれが放つ香をかぐ。彼は、神の前の祭壇が光を放ちつつもやがて崩れるのを予感する。しかし彼はそこに清い献げ物を見た。

その清らかな献げ物は、生きた存在である。ろうが溶けて流れ落ちる。「白玉」のような尊く清い存在が、涙と血を流しているのだ。ろうそくは溶けていく。その中心にある芯。それはその清い献げ物の生命である志、「心志」なのだ。その「心志」まで、彼、その存在は自らを燃やし尽くしてしまう。

尹東柱が自分の部屋のろうそくのうちに見た、涙と血を流し自らを献げて燃え尽きる存在とは、イエス・キリストとしか考えられない。イエスはラザロの死を前に涙を流し（ヨハネ11:35）、十字架に血を流した（ヨハネ19:34）。

ところで普通、イエスは「神の小羊」にたとえられる。ところがこの詩で尹東柱は、献げ物の「羊」ではなく「山羊」を見ている。どうしてだろうか。

旧約聖書で山羊が神への献げ物として描かれているのは、まず旧約聖書・創世記第15章の神とアブラハムの契約の場面である。

「主は言われた。『三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。』アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。」15:9-10

ここでアブラハムは山羊を、羊や牛とともに献げ物として用意するように命じられる。

またレビ記には、罪の贖いに関して次のような規定がある。

「共同体の代表者が罪を犯し、過って、禁じられている主なる神の戒めを一つでも破って責めを負い、犯した罪に気づいたときは、献げ物として無傷の雄山羊を引いて行き、その頭に手を置き、主の御前にある焼き尽くす献げ物を屠る場所でそれを屠る。これが贖罪の献げ物である。祭司は献げ物とする雄山羊の血を指につけて、焼き尽くす献げ物の祭壇の四隅の角に塗り、残りの血はその祭壇の基に流す。」4:22-25

このように献げ物の山羊は頭に手を置かれ、また屠られて血を流す。山羊は罪の贖いの献げ物として用いられ、これによって罪を犯した者は責めから解かれる。

尹東柱がこのようなレビ記の規定まで知っていたかどうかはわからないが、この詩において彼は、自らを焼き尽くすろうそくにイエスを重ね、またそのイエスが罪の贖い（赦し）のための神への献げ物であることを思いめぐらしていたのではないだろうか。

このろうそくによって「暗闇」は彼の部屋から逃げ去る。受難を前にしてのイエスの言葉が思い出される。

「だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」ルカ 22:53

「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。」ヨハネ 12:31

尹東柱はイエスの誕生を祝うクリスマスに、イエスの生涯の終わりの十字架を思ったのであろうか。

この時代、朝鮮のキリスト教会はどのような状況にあったかを少し確かめてみたい。この詩が書かれた翌年、1935年9月6日から、平壤の西門外教会で朝鮮イエス教会長老会総会が開かれた。その会議録の中の「東満老会状況報告」は、「経済恐慌」「凶年」の困難を述べ、また「匪賊の襲撃」による被害が深刻であることを伝えている。農村教会などでは信徒の離散流離の現実がある一方、患難の中でも信徒たちが熱心に聖書を学び、伝道に励んでおり、新しい教会の設立が多い、と記している。当時間島の長老教会は東満老会に属していた。

時代は遡るが、尹東柱が生まれて3年目、1919年の三・一独立運動に際して、龍井では教会の鐘を合図に3万人が集まって集会を開き、デモを行い、それに対する日本側の弾圧の銃撃により13人が即死、30人余りが負傷（6人が後に死亡）したと伝えられる。またその翌年1920年10月、日本軍は2万人を投入して間島の村々を攻撃し、死者3000余、焼失家屋2500余、焼かれた学校約30、焼かれた教会10、強姦76とされる（朴殷植『韓国独立運動の血史』1920.10.5～11.23における被害状況）。

17歳の尹東柱が「ろうそく 1本」の詩を書いたとき、その胸に去来する思いは、こうした歴史や当時の現実とは無関係ではなかったであろう。

3. 神社参拝の強制と「こんな日」

尹東柱は「ろうそく 1本」を書いた翌年の1935年9月、家を離れて平壤の有名なキリスト教系学校、崇実中学校に編入した。ところがまさにその時期、日本はキリスト教学校に対して神社参拝を強制したのである。11月14日、平安南道の安武直夫知事は平壤の道庁会議室に中等学校校長会議を招集し、会の冒頭に神社参拝をしてから会議を始めると言った。崇実の校長マッキューン（尹山温）らはこれを拒否した。長老教会平壤老会は12月、神社参拝をめぐる総会を開こうとしたが、警察の脅迫により黙祷のみをもって散会せざるを得なかった。

後に平壤の山亭岷教会の牧師となり、神社参拝拒否を貫いて獄死することになる朱基徹牧師は、同じ12月、平壤の長老会神学校の査経会に招かれ、「一死覚悟」と題する説教を行った。それは、神社参拝問題を念頭に置いて、イエスに従う者は迫害に決して屈することとはできないと訴えるものであった。

翌1936年1月18日、朝鮮総督府はマッキューンの校長職を罷免した。1月22日付の「朝鮮毎日新聞」（日本語紙）は次のように伝えている。

「崇実学校では20日午前9時、全校生徒校庭に集まり、神社参拝問題に対し俄然ストライキ状態に入らんとする形勢あり。口々に万歳を唱へて校門を出て示威運動に移らんとしたの〔1字不明〕急報に接した平南警察部及平壤警察署より数百名の警官が自動車にて急行、校門を固めて一步も出さず鎮圧を加えた。数百の学生は講堂に引揚げて盛んに校歌を高唱しつつある。」

尹東柱もこうした神社参拝反対運動に参加したが、学校が廃校の見通しとなり、3月、みずから崇実を退学し、故郷の龍井に帰って光明学園中学部に編入した。ところが光明学園は元々長老教会が経営する「永新学校」であったのが、経営困難から日本人の日高丙子郎の手に渡り、その名を「光明学園」と改めて、日本の支配を推進する学校に変貌していた。崇実では授業は朝鮮語でなされていたのに、光明ではすべての学課が日本語でなされていた。尹東柱の竹馬の友と言われる文益煥牧師は、「われわれが神社参拝を拒否して龍井に戻って編入した学校は、朝鮮人の皇国化のために建てられた光明学園中等部だった。釜から飛び出たと思ったら炭火の上にしゃがんだ格好だった」と述懐している。

光明学園に編入していくらも経たない 6 月 10 日付で、尹東柱は「こんな日」という詩を書いた。

こんな日

仲のよい正門の二つの石柱の端に
五色旗と太陽旗が踊る日
線を引いた地域の子どもたちが喜んでいる。

子どもたちには一日の乾燥した学課で
陽の明るい倦怠が包み
「矛盾」という二字を理解できないほど
頭が単純だったのか。

こんな日には
なくしてしまった頑固だった兄を
呼びたい。

「五色旗」とは「満州国」の旗であり、「太陽旗」とは日の丸である。何かの祝日であろう。その二つの旗が校門の上で踊っている。この旗の下をくぐって登校するのは、尹東柱には屈辱ではなかっただろうか。それなのに地域の子どもたちは喜んでいる。自分たちには太極旗があるのにそれを掲げることにはできず、「満州国」は独立国であるはずなのに「日の丸」がはためいている。「矛盾」という 2 字が彼の頭に湧き上がる。しかし何も言えない。「なくしてしまった兄」にそれを訴えたい。その兄とは、独立運動で捕らえられて今は遠くの警察署に拘禁されている従兄の宋夢奎のことであろう。

4. 「新しい道」と「奇跡」

「こんな日」から 2 年後の 1938 年 4 月、尹東柱はソウル（当時、京城）のキリスト教系学校、延禧専門学校文科に入学した。満 20 歳。日本によって朝鮮の言葉、文化が奪われ失われていく危機を彼は光明学園で痛切に感じてきたであろう。いま新しく延禧に学んで希望を持ち、文学を究めつつ民族文化を保ち育みたいとの願い強くしていたのではない

だろうか。まもなく彼は「新しい道」（5月10日付）を書く。

新しい道

川をわたって森へ
峠を越えて村へ

昨日も行き、今日も行く
わたしの道、新しい道
タンポポが咲き、カササギが飛び
娘が通り、風が起こり

わたしの道はいつも新しい道
今日も……明日も……

川をわたって森へ
峠を越えて村へ

明るい、希望に満ちた詩である。この詩の言葉の響き、光景の一つひとつ、また未来に向かって歩む彼の気持ちや足音を大切に味わいたい。

タンポポが咲き、カササギが飛び
娘が通り、風が起こり

この原詩の響きとリズムは、わたしには特に美しく印象的に感じられる。

川をわたって森へ
峠を越えて村へ

この2行は詩の冒頭で歌われ、また最後にも繰り返される。川をわたり、森を経て、峠を越え、村へと道を歩いて行く姿が見えるようである。これは尹東柱の具体的、日常的な経験を思わせると同時に、彼の人生の旅路をも連想させる。さまざまな出会いがあり、また孤独もあつただろう。明東、龍井、平壤、ソウル、やがては東京、京都、そして福岡。

ここでイエスの旅を思いつつ、「村」という言葉に注目してみよう。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる

る病気や患いをいやされた。」マタイ福音書 9:35

ベタニアの村では、マルタ、マリア、ラザロとの出会いがあり、交流があった。

「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女性が、イエスを家に迎え入れた。」ルカ福音書 10:38

尹東柱は町や村を巡ったイエスのことを思ったであろうか。あるいは次のようなイエスの言葉が胸をよぎることがあったかもしれない。

「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。」ルカ福音書 13:33

「新しい道」から2ヵ月と少し後、彼は「異蹟」(1938.6.19)という詩を書いた。ここでは「奇跡」と訳すことにする。

奇跡

足についた汚れをみな取り除いて
たそがれが湖の上を歩いて来るように
わたしもそっと歩いてみましようか？

わたしがこの湖のほとりへ
呼ぶ人もなしに
呼ばれて来たのは
ほんとうに奇跡です。

今日に限って
恋しさ、うぬぼれ、妬み、これらが
しきりに金メダルのように触れて来るのです。

けれども、わたしのすべてのことを何も考えず、
波に葬ってしまいますから
あなたは湖面にわたしを呼んでください。

尹東柱は、マタイ福音書 14 章 22-33 節に記された湖上を歩くイエスの物語を思っていたのではないだろうか。ペテロは舟に乗り、向こう岸に渡ろうとして逆風に悩まされていた。夜が明ける頃、湖上を歩いてくる人影を見て幽霊だと思い恐怖の叫び声を上げた。しかしそれはイエスであった。「安心せよ、わたしだ。恐れるな」と声をかけられたペテロは、イエスのそばに行きたいと切望した。

「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに〔原語ギリシア語を直訳すれば「あなたに」〕行かせてください。」

イエスの「来なさい」という声に、ペテロは水の上をイエスに向かって歩き出す。

尹東柱はこれまで自分が経てきた道を思い、ここに至ったことをまさに「奇跡」だと感じる。はっきりと自分を呼ぶ声を聞いたわけではないが、しかしやはり「呼ばれて来た」のだ。今、離れがたく捨て難く思う自分のさまざまな思い、願いをすべて波間に捨てて、ひたすら「あなた」のもとに行きたいと願う。「あなたは湖面にわたしを呼んでください」。その「あなた」とは、イエスではないだろうか。困難な時代に、自分自身の迷いや悩みを抱えつつ、彼はイエスに呼び求めたのだ。

ここで「金メダル」という言葉が出るのは、その 2 年前の 1936 年、ベルリンオリンピックのマラソンで孫基禎選手が金メダルを獲得したことが反映していると思われる。非常に大切なもの、誇りと愛着の象徴であろう。

この詩が書かれた直後、「東亜日報」（6 月 28 日付）は、平壤で開かれていた米国北長老会宣教会総会が神社参拝を拒否して教育事業から撤退することを決議した、と伝えた。この記事はまた、延禧専門学校の校長・元漢慶（H. H. アンダーウッド）が「学校のため宣教会から脱退することをその場で宣言した」と伝えている。詳細は不明だが、延禧専門学校は神社参拝を受け入れても学校存続・教育継続を決意した、ということであろう。

この年 1938 年、朝鮮のキリスト教は決定的な悲劇を経験することになる。日本による神社参拝強制は、学校からさらに教会そのものに的が絞られていた。9 月 10 日、朝鮮イエス教会長老会総会は、警察の大規模な介入と強圧によって神社参拝決議を行った。

5. 「序詩」——天を仰ぎ

「序詩」は尹東柱の代表作である。元々題は付けられていなかった。

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥なきことを、
木の葉に起こる風にも
わたしは苦しんだ。
星をうたう心で
すべての死んでゆくものを愛さなければ
そしてわたしに与えられた道を
歩みゆかねば。

今夜も 星が風にさらされる。

1941.11.20

「死ぬ日まで天を仰ぎ」

尹東柱は天を仰ぎ、思いを巡らし、自分の決意を言葉にする。「天」(ハヌル)は、イエスが弟子たちに教えた「主の祈り」の冒頭「天におられるわたしたちの父よ」の「天」である。

「天を仰ぎ」。あるとき気がついた。これはイエスの姿と同じだ、と。福音書にはイエスが天を仰がれたことが記されている。具体的に確かめてみることにしよう。

まずマルコによる福音書第6章41節。5つのパンと2匹の魚の話。大勢の群衆を前にイエスが天を仰いでこれを祝福する場面である。

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。」

天を仰ぐ尹東柱と、天を仰ぐイエスの姿が重なる。

二つ目の例はマルコ福音書7章34節。耳が聞こえず口が利けない人にイエスが出会ったとき、イエスは天を仰いで嘆息する。

「そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッフアタ』と言われた。これは、『開け』という意味である。」7:33-34

重い困難を負った人と出会ったとき、イエスはその人に深く共感すると同時に、その人を何とかしたいと切に願った。その思いを神に向け、天を仰いで嘆息した。

困難を負った人への共感が、尹東柱にもあったに違いない。それはたとえば「ツルゲー

ネフの丘」(1939.9)にも込められているのではないだろうか。

三つ目の例は、ヨハネ福音書 17 章 1 節。最後の晩餐におけるイエスの祈りである。ヨハネ福音書では、イエスの弟子たちに対する告別の言葉が長く続く。語っても語っても限界がある。あとはもう祈るしかない。

「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。『父よ、時が来ました。』」
死を前にしてのイエスの祈りの姿である。

イエスは生涯、数限りなく天を仰いで祈られたであろう。それは切実な祈りであり、それは悲しむ人々への共感、苦しむ人々への愛から来るものであった。尹東柱はそのようなイエスを何度も思っていたらう。イエスの祈りがこの詩に反響している。イエスの祈りが、尹東柱の心と体に宿っているように感じられる。尹東柱の中で、イエスが呼吸しているように思う。

「序詩」のもう一箇所注目してみる。

「わたしに与えられた道を 歩みゆかねば」

この「道」は先の「新しい道」とつながっているであろう。

これもイエスの言葉を想起させる。迫害の危険の迫る場面である。ルカ福音書 13 章 31 節から読んでみる。

「ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』イエスは言われた。『行って、あの狐に、“今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える”とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。』」ルカ 13:31-34

イエスは自分の死をすでに覚悟していた。自分の身の安全を守る道を選ぶのではなく、「自分の道を進まねばならない」。神が召された道を、自分の使命の道を歩まなければならない。同じように、尹東柱も損得や自己保身の道ではなく、「わたしに与えられた道を歩みゆかねば」と決意していた。「死ぬ日まで天を仰ぎ」天を仰ぎつつ、死ぬ日まで、自分の使命の道を歩むことを彼は決意したのである。すでに彼は自分の 3 年 3 ヶ月後の死を予見、覚悟していたかのようだ。

この「序詩」は尹東柱の生涯の願いと祈りと決意を表すものであるが、それはイエスと深く通じていると感じる。

尹東柱は翌月 12 月、戦時学制短縮により延禧専門学校を卒業。日本に渡るために「平沼」と創氏。翌年 1942 年春、東京の立教大学に学び、間もなく京都の同志社大学に移った。1943 年 7 月、特高に逮捕され、翌年京都地方裁判所で「治安維持法違反」で懲役 2 年の判決を受け、福岡刑務所に投獄された。判決文の 1 節は次のようである。

「……民族意識ノ昂揚ニ努メ、以テ国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ其ノ目的遂行ノ為ニスル行為ヲ為シタルモノナリ」

「国体」については次項でいくらか触れる。

6. 「十字架」と聖書

日本は戦争体制を確立するため、文化人を動員した。その一環として「日本文学報国会」が 1942 年 5 月に設立された。会長には日本の代表的なジャーナリストで思想家、徳富蘇峰が就任した。詩部会長には高名な詩人、高村光太郎、短歌部会長には万葉集研究者としても知られる歌人、佐佐木信綱が就任した。

日本は 1941 年 12 月 8 日、真珠湾を奇襲攻撃した。高村光太郎は「陛下のみこころを恐察し奉った刹那、胸がこみ上げて来て我にもあらず涙が流れた」と述べた。「真珠湾の日」と題する詩の一部はこうである。

「昨日は遠い昔となり、／遠い昔が今となつた。

天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。……

私の耳は祖先の声で満たされ、／陛下が、陛下がと／あへぐ意識はめくるめ眩いた。

身をすてるほか今はない。／陛下をまもらう。／詩をすてて詩を書かう。」

「シンガポール陥落」(1942. 2. 12) ではこう歌う。

「シンガポールが落ちた。／つひに日本が大東亜を取りかへした。／あまり大きな感激は／むしろ人を無口にさせる。」

高村の関心は「天皇を守る」ことに集中している。

尹東柱は河出書房の『現代詩集』全 3 巻(1939～1940)を所蔵していた(延世大学校尹東柱記念館発行の冊子所収「尹東柱の所蔵図書」)。そこには高村光太郎の詩が収められていたから当然それを読んでいたのであろう。それをどのように評価していたかはわからないし、また上記の高村の文、詩はこの詩集以後のものであって、それが尹東柱の目に触れて

いたかどうかは不明である。いずれにしても尹東柱と高村はあまりに対照的である。

月刊誌「中央公論」1943年10月号には、佐佐木信綱の次のような短歌が掲載されている。

「大御心やすめまつるとますらはは敵^{あたう}膺^{きた}ち懲^{くが}む空に海に陸に」

意味はおおよそ次のようだろうか。「天皇陛下の大いなる御心^{みこころ}を安らかにして差し上げようと、立派な男子は敵を空に海に陸に打ち懲らしめようとしている」。

同じ「中央公論」10月号の後書にはこういう言葉がある。

「今や一億国民は、国体護持に凡てを捧げつくさねばならぬのである。わが日本に於ては国体を離れていかなる事実もなく、国体を離れていかなる個人の生活も存在し得ないことをこゝに改めて深思すべきである」。

このように「国体」——ひらたく言えば「万世一系の天皇がこの国を統治し、国民は一身を捧げて天皇に忠を尽くす」という国のあり方——一色に覆われたのが当時の状況であり、この枠組みにはずれる者は容赦なく処罰された。

同じ「中央公論」の号の中で山田孝雄^{よしお}（国語学者。当時、神宮皇學館大學学長）は、天皇が皇大神宮（伊勢神宮内宮）に行った際、「三種の神器」（天皇の位を示すもの）の一つ、「八勾曲玉」（普通は「八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}」と言われる）を収めた小箱を「拝した」ときの感動を次のように述べている（「國體の體認」）。

「これを拝し奉つた時の私どもの身内の戦^{おのの}きは、神代をそのまゝ拝し奉つた感激であり、神代より今日まで生きて生きて生き抜いてゐる国体の現実をまざまざと目のあたり拝した感激であったのである」。

これに対して尹東柱が獄中で求めたものは何であったか。それは聖書であった。彼は故郷の家族に「英日対照新約聖書」を送ってほしいと頼んだ。しばらくしてそれが届いた。わたしの手元には「英日対照新約聖書」（神戸英国聖書協会、1928）がある。英和対照聖書が当時何種類もあったとは思えないから、彼が獄中で手にしていたのはこれと同じものかもしれない。

おそらく彼はその新約聖書を、自分の死を覚悟しつつ魂の最後の抛り所として、毎日読んでいたであろう。

“And Jesus cried again with a loud voice, and yielded up his spirit.” (Matthew 27:50)

「イエス再び大声に呼はりて息絶へたまふ。」 マタイ伝福音書 27:50

1945年2月16日、金曜日午前3時36分、福岡刑務所の独房で「東柱さんは、何の意味

はわからぬが、大声で叫び絶命しました」と看守は語ったという。

「十字架」（1941. 5. 31）の詩の一節が思い浮かぶ。

苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストにとって
そうだったように
十字架が許されるのなら

首を垂れ
花のように咲きだす血を
暗くなってゆく天の下に
静かに流しましょう。

尹東柱は、イエスが大声で叫んで息を引き取ったのと同じように、大声で叫んで息を引き取った。彼がかつて控えめに「十字架が許されるのなら」と願ったとおり、彼は自分に与えられた道を歩んだ果てに、イエスと同じように首を垂れた。

7. 平和への願い

尹東柱の死から半年後の8月15日、彼の竹馬の友、文益煥はラジオから流れてくる天皇の震える声を聞き、思わず嘆息して言ったという。

「東柱よ、お前が生きていてくれたら……」

後に文益煥牧師は、カトリック、プロテスタント共同の聖書翻訳事業の責任者となり、それは「共同翻訳聖書」として大韓聖書公会から1977年に刊行された（改訂版は1999年）。彼はあるときこう言ったという。

「東柱が生きていてわたしがする聖書の翻訳を助けてくれたなら……」

同じく文益煥は獄中から妻に宛てた手紙（1981. 11. 8）の中でこう書いている。

「福岡刑務所で獄死した東柱には、監房の中で血の涙にくれ、胸の中で詠じながらも紙に書き残すことができなかつた詩がたくさんあったと思うのです。私は何とかこれを甦らせることはできないものかとずいぶん以前から考えてきたのですが、私たちとイエスとの関係もそのようなものではないでしょうか。ルカは、自分を十字架にかけたものら

の罪を赦してくださいと祈る心で、絶望的な闇をくぐり抜けられたイエスの心を、読みとっていたのだと思います。」『夢が訪れる夜明け——文益煥獄中書簡集』

また彼は、時期は前後するが、1967年2月に尹東柱についてこう書いた。

『彼の抵抗精神は不滅の典型だ』という文を読むごとに、わたしの心はすぐにはうなずけない。彼にあってはすべての対立は解消された。彼の微笑に漂う温かさに溶けない氷はなかった。彼には皆が骨肉の兄弟だった。わたしは確信をもって言うことができる。彼は福岡刑務所で最後の息を引き取りながらも、日本人を思って涙を流しただろうと。彼は人間性の深みを掘り出し、その秘密を知っていたから、誰も憎むことができなかつただろう。彼は民族の新しい朝を願い切望する点では誰にも劣らなかつた。それを彼の抵抗精神と呼ぶのだろう。しかしそれはけっして敵を憎むことではあり得なかつた。少なくとも東柱兄は、そのように感じることはできなかつただろう。』

文益煥が言うとおりであれば、イエスがエルサレムの滅びを予見して流した涙を、尹東柱も日本の滅びを予見して流したかもしれない。

「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。

『もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。』ルカ 19:41-42

そしてあの「序詩」の中の言葉、「すべての死んでゆくものを愛さなければ」は、まずは虐げられ、命を奪われていく同胞への愛を指していたとしても、なお「すべての」の中に虐げる側の日本人をも含むものであるとすれば、わたしたち日本人はあらためて肅然として姿勢を正される。

京都地方裁判所の判決によれば、尹東柱は友人に対して「飽ク迄日本ノ敗戦ヲ期セサルヘカラサル旨自己の見解を縷々披瀝シ」、また「朝鮮独立ヲ実現スル外無キ所以ヲ力説シ」た、とある。

宋夢奎のように直接の独立運動をしたわけではないにせよ、彼はファシズム天皇制国家日本の敗戦を期待し、朝鮮の独立を切望していたことは間違いないだろう。しかしそれは日本人を憎むことではなかつた。彼は「平和」という言葉を直接には書き残さなかつた。時代がそれを許さなかつた。けれども彼は、民族の独立とともに、日本と日本人の平和的再生を願っていたのではないだろうか。彼はその生と死をとおして、また書き残した珠玉の詩をとおして、今も平和を呼びかけている。それはわたしたちの中に反響をもたらさずにはいない。

イエスの悲しみは尹東柱の悲しみとなり（「八福」）、イエスの苦難と死は尹東柱の苦難と死につながった。

かつて「あなたは湖面にわたしを呼んでください」（「奇跡」）と願った彼は、危険を覚悟して湖面ならぬ玄界灘を渡り、日本に留学した。日本は彼の尊い命を奪い、京都で、また福岡の獄中で書かれたはずの彼の詩を抹殺した。しかしイエスの死が死で終わらず復活したように、尹東柱の存在と詩は今も生きて、わたしたちに新しい命と平和への願いを呼び起こす。

けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば
墓の上に青い芝草が萌え出るように
わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも
誇らしく草が生い繁るでしょう。

「星を数える夜」（1941. 11. 5）

世界に戦争が拡大し、日本が再び軍備大拡張に走るこの時、尹東柱はわたしたちに根源的に重要なものの実現を、つまり真実と心の温かさと、正義と平和を呼びかけてやまない。

(2024. 10)